

フィールドワーク 心得帖

北インドの 村のイメージと実態

二〇〇四年から二年間インドに派遣され、北インドの村でフィールド調査を行う機会に恵まれた。私はフィールド調査を研究の中心に据えるタイプの研究者ではないが、それゆえに、フィールド調査の経験は得難いものであった。インドでは農村調査は昔から数多くなされてきており、相当な蓄積があるが、私がテーマとした「農村開発行政」の分野は重要とされてきたにもかかわらず、優れた研究は少ないように思われる。それはともかく、現実には既存研究から描き出される姿よりもはるかに複雑なものであることを二つのエピソードから紹介したい。

一般に村の調査の場合、全員を調査する悉皆調査が理想的である。しかし、実際には時間と資源の制約がある場合がほとんどで、一部の村人のみを調査対象とする標本調査が行われることが多い。その場合、できるだけ「一般的な実態」に近づくこととするならば、インタビュ対象者はできるだけ「ランダム」に選択する必要がある。もっとも、ランダムとはいっても実際には村の全成人の投票名簿を基にして、そこから一定の間隔で名前を選択する「系統抽出」などを適用することになるのであるが、いずれにせよ行き当たりばったり村人にインタビュするのではなく、事前にターゲットを決めて面接にいくのである。その場合うまくターゲット

トの村人と会えるかどうかが問題である。特に播種や収穫の繁忙期は畑や田んぼで仕事をしている場合が多く、スムーズに会えない場合が度々である。

我々の調査でも、そのような例がたびたびあり調査の効率を落とすものとなった。それでガイド兼調査員の次のようなアドバイスを容れることにした。すなわち、五月から六月に調査を行うというものである。なぜか。五月から六月の北インドのガンジス平原はモンスーン前の一年で最も暑い時期であり、灌漑設備がなく旱魃常襲地域の調査地域では農業はほぼできない。従って農民は家に張り付いているはずで、簡単につかまえてインタビュできるだろう、というのである。私の雇ったガイド

兼調査員はその調査地とは別の地域出身ではあったが、農民であり、事情は詳しいから、彼らのアドバイスに従うのが間違いないと考え、あえて六月に調査を設定した。その結果はどうだったであろうか。

日中五〇度の外気の中、タオルを頭に巻き水を常に振りかけながら一週間野良をうつろつき回り調査を行ったが、ターゲットの村人にあう確率はかえって大きく落ちてしまう結果となった。なぜか。確かに水のない酷暑期のゆえに野良仕事はできず農民は野良にはいなかった。しかし、村人は家に閉じこもってもしなかった。どこへ行ったかというところ、多くは出稼ぎに近郊または離れた都市部に行ってしまったのである。調査員は都市部に比較的に近い地域の出身であったこともあって、このような近年の変化をよく把握していなかったのである。

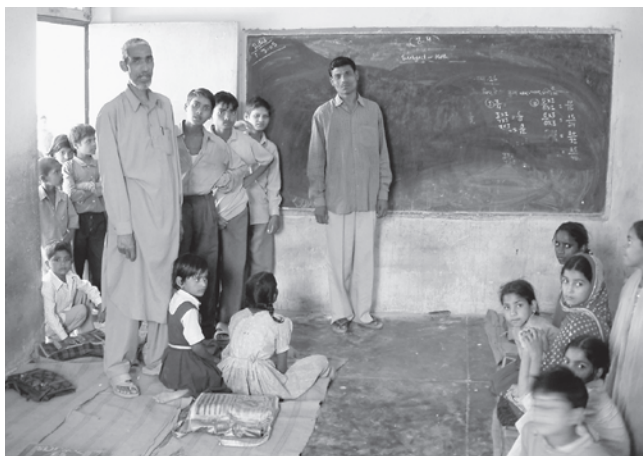
この経験では、体力的にはきつい思いをしたにも関わらず期待通りの成果は収められなかったが、しかし、おかげで自分なりに一つの貴重な事実認識をすることができた。それは旱魃常襲地域では農作業ができない時期は、農民は所得を補うために都市部に出稼ぎにいくのが近年

かなり一般的になっているという事実である。そして調査後のデータを集計してみるとそのような出稼ぎは農家の規模やカーストを問わず、かなり一般的になっており、これが調査地域の社会の変容に大きく関わっている可能性があることが理解されたのである。

次のエピソードは教育に関するものである。

教育が社会的上昇の鍵であることは今日、ほとんどの村人に認知されているといつてよい。普通教育の普及という点では農村部では政府が中心的役割を担うべきとされるが、しかし、政府が運営する小学校の実態は問題だらけである。例えば、村人の指摘する問題点として、児童数に対して教員が圧倒的に少ない、教員の質も低く満足に授業が行えない、そもそも教員がきちんと学校にこないし、来ても授業をやらないでサボっている、などである。そのような状況で、教育熱心な村人はどのようにして自分の子供によりよい教育を受けさせようとしているのであろうか。一つの選択は都市部の私立学校に送ることである。ただし、これはかなりの金持ちでないとできない選択である。他の選択肢は自分たちでお

専門：インド現代政治・社会論、農村開発行政、比較政治学、選挙分析
 近著に 近藤則夫編『インド民主主義体制のゆくえ ―挑戦と変容―』
 アジア経済研究所、2009年（研究双書No.580）がある。



村の「補充学級」（2005年3月1日筆者撮影）

金を出し合って「補充学級」を運営することである。

この「補充学級」と呼ばれるものは多くの地域で今日みられるものであるが、それは皮肉なことに、質の高い教育に対する需要が大きくなっているにもかかわらず、政府の学校が満足に答えられない現実の反映である。それはともかく、この補充学級では一定の教育を受けた村の失業者青年などを雇って授業を行っている場合が多い。我々が訪れたところでは、それら青年の給与は政府の学校の先生の給与の一／三〜一／二にも関わらず、政府の小学校に比べれば、かな

り実質的に有効な授業を行っていたといえる。そのような効率的な運営ができるのは補充学級が、村人自身がお金を出し合って運営されているため、村人の目が常に光っており、村の青年といえども一生懸命に教えないと給与をもらえないからである。もちろん補充学級にも様々な問題があり、手放しで賛美するわけにはいかないが、一定の学費を払えば望む村人は子供を授業によこすことができるというのを聞いて、村人の自主的な努力という点では大きく評価されるべきとの一種の感動を抱いてその補充学校を後にした。

しかし、調査終了後、データを集計してみると、決して小さなこととして済まされない問題があることに気づかされた。それは補充学級が村社会自体によって組織されたものであるがゆえに、村社会のミニチュアという側面があり、村の問題を引きずっているという点である。伝統的にインド社会は「カースト」を基本的単位として成り立っている。そして社会の最底辺に「不可触」として差別され、分断され

てきた「指定カースト」と呼ばれる人々がいる。もちろん現在では差別は禁止され、また、それらの人々のために様々な優遇措置がなされているが、差別は残っているのが実態である。自分が気づかされたことは、そのような差別・分断の構造が補充学級にも反映されていたという点である。要するに指定カーストの子供が補充学級にはいなかったのである。標本調査であるから、指定カーストの児童もごく少数はいる可能性はあるが、たとえそうだとしてみてもごく少数のはずである。指定カーストの子供が補充学級にはいない具体的な理由はいくつか考えられる。例えば、指定カースト出身の親は、子供たちが不愉快な事件に遭遇するかもしれないと恐れて、子供たちを行かせないのかもしれないし、あるいは、補充学級を取り仕切る村の有力者が、指定カーストの子供が来ることを歓迎していないからかもしれない。また、補充学級に子供を送るためには高くはないとはいえず学費を払うことを要求されるので、経済力のない指定カーストの親は社会的な差別がなくともお金を払うことができない、行かせられず、しかたなく政府の学校に行かせている

ということなのかもしれない。政府の小学校は、質は低いとはいえ授業料はほとんどたただなのである。以上のような様々な理由が考えられるのであるが、この点は調査が終了した後に気づいたため深くは追究できなかった。

社会科学の研究は過去の蓄積の上にならっており、過去の研究を基に作業仮説を考えてそれをフィールドから得られた実際のデータで検証するというのが正統なプロセスであろう。しかし広大で変化し続ける現実を前にすると、過去の研究がどれだけ実態をカバーできるのであるうか。この点を考えると説得的な「過去の研究を基にした作業仮説」が構築され、研究の出发点とすることができると領域は、実はきわめて限られているといえるべきである。従って関連領域の研究は考慮しつつも、まず、フィールド調査から始めるというスタイルも決して悪い方法ではない。少なくとも既存のイメージから外れた多くの発見に出くわした後の方がより実態に近い仮説を提出できるのである。

（こんどう のりお／アジア経済研究所南アジア研究グループ）